

ゆきとじいじいのオリエンテーリング

No11 ゆき：渡辺 幸（8歳） 爺爺：武石雄市

カモシカの赤ちゃん（5月8日）

ゆき「爺爺は、今日もなでら山に来てたのか」
爺爺「そうだよ。いつものことだけど、コントロールの設置とかテープを張るとかしておかないといけないからね、東根からは遠いんだけどこのところ毎日来てるよ」
ゆき「フーン、そうなんだ、ぼくたちのコースにテープ張ったの？」
爺爺「Nコースの黄色テープは明日張るんだけどね、途中でカモシカの親子に出会って大変だったよ」
ゆき「エーッ、カモシカに会ったの？」
爺爺「うん、途中で水路があるんだけど、その水路を飛び越そうとして赤ちゃんカモシカが落ちたみたいなんだ。お母さんカモシカも困ってしまって、水路に下りては上がり方のお手本を見せてるんだが、赤ちゃんは上がれないで泣いていたんだよ」
ゆき「可愛そう。じいじい、助けられなかったの？」
爺爺「うん、爺爺は助けることにしたよ。自然は厳しくてこのままではカモシカの赤ちゃんは死んじゃうかもしれないからね。お母さんカモシカは赤ちゃんを爺爺にさらわれると思って前足で地面をたたいて威嚇するんだけど」
ゆき「威嚇って？」
爺爺「威嚇ってね、赤ちゃんに触ったら駄目！！っておどすことだよ。でも、爺爺は荷物を全部おろして水路に飛び降り、赤ちゃんに『怖くないから動かないでね』と声を掛けて抱き上げようとするんだけど、赤ちゃんは捕まったら大変だと思って水路の中を逃げ回るんだよ」
ゆき「それからどうしたの？」
爺爺「うん、赤ちゃんカモシカは逃げ回るしさ、爺爺は助けたいので追いまわしているうちに、カモシカちゃんが急流で水がどんどん流れている長 - い水路に滑り落ちてしまったんだよ」
ゆき「カモシカの赤ちゃん死んじゃったの？」
爺爺「爺爺も心配で心配で、急いで土手を下に駆け下りていったよ」
ゆき「そしたら？ どうしてた？ 死んでた？」
爺爺「赤ちゃんは、水でずぶ濡れになってブルブル震えながらスノコの上でうずくまっていたんだ」
ゆき「生きてたんだ、助けた？」

爺爺「うん、爺爺もスノコの上に降りるのは大変だったけど、頑張って助けたよ」
ゆき「じいじい、よかったね。怪我してなかった？ 赤ちゃんお母さんの所に行ったかな」
爺爺「うん、その後お母さんカモシカの姿は見れなかったけど、見つけてくれたと思うよ」
ゆき「見つかるといいね。カモシカも大変だね」
爺爺「人間が便利な生活をするために、自然の中にいろんな工事をするんだけど、工事でそこに大昔から住んでいた動物たちの生活を無視してしまうから、動物はもちろん、貴重な植物や昆虫なども生きられなくなってしまふんだよ」
ゆき「水路にふたをしたらいいのにな」
爺爺「そうなんだけど、そうするとお金がかかるから、山の中だし、動物たちのことは無視して、ま、いいやとふたをしなかったんだね」
ゆき「じゃあ、橋を架けて動物たちが行ったり来たりできるようにしたら？」
爺爺「そうだね。山の中に道路を通すときとかも、その分のお金を計算して、人間と動物や植物がお互いに楽しい生活できるように考えたいね」
ゆき「カモシカさん、頑張ってるね」

米沢大会のNコース（5月12日）

爺爺「ゆき、黄色のテープ判った？」
ゆき「うん、わかったよ。でも、何処かのおばさんがテープが途中で切れてたけど、ぼく、どうしたの？と聞かれたよ」
爺爺「それで？」
ゆき「ぼくは、テープのあるところはよかったんだけどさ、3番の大きな石に行けなかった」
爺爺「やっぱりそうか、4番までは道を選ぶだけで行けるコースにしたんだが、3番が外のコースのとても近いところになってしまって、子供たちは行けるかどうか心配だったんだ」「それでどうしたの？」
ゆき「優子お姉さんに教えてもらったんだ」
爺爺「優子さんに追いつかれたのか。ゆき、Nクラスで1位だけど、3番が見つからない割には早かったんだね」
ゆき「4番から8番までは黄色テープがあったし、そこから後2個コントロールがあったけど、道

だったし、ゴールの近くだからみんな見てるし、ぼく、走ったからね」

爺爺「おめでとう。じいじいは、ゆきたちのような小学生コースを作るために、今回も勉強させてもらいました。ゆきは、爺爺の弟子として毎回いろんなことを教えてくれるので助かるよ」

ゆき「どういたしまして。でも、ぼく爺爺に何も教えてないよ」

爺爺「爺爺がそう思ってるから、いいじゃん」

ゆき「はい、わかりました。じいじい、オリエンテーリング大会は今度いつあるの」

爺爺「爺爺がやるのは、7月20日と21日だよ」

ゆき「へー、夜もオリエンテーリングやるんだ。ぼく、できるかな」

爺爺「難しいだろうね。ナイトオリエンテーリングは、ゆきが、もう少し大きくなってからにしたほうがいいと思うよ。昼にやる大会が2回もあるから昼の大会で頑張るさ、ナイトの時はお手伝いしてくれたらうれしいな」

ゆき「うん、いいよ。夜って怖そうだね」

爺爺「ナイトをしたことがない人は皆そう言うけど、頭にライトをつけてるし、みんなも回ってるので特別間違ったりしないと怖い気持ちも忘れてしまうよ」

ゆき「そうなんだ。ぼくもいつかやってみるね」

俳句（5月18日）

爺爺「ゆき、俳句作れるんだってね」

ゆき「うん、町探検のとき、先生に教えてもらったんだ」

爺爺「爺爺は、おばあさんからゆきが俳句作って聞いてビックリしたんだけど、ほんとなんだ」

ゆき「この間の大会の後、おばあさんとちと広重温泉に入って作ったよ」

たきを見て 温泉はいり 最高だ

「おばあさんから、季語がないって言われたけど、季語を考えるのは難しいね」

爺爺「爺爺は、野生人だから良い俳句は作れないけど、季語はこの俳句はいつの季節なのかわかる言葉が入ってるってことだと思うよ」

ゆき「ふーん、なんだかわからないけど」

爺爺「じいじいも文化人にならなきゃならないね。ゆき、オリエンテーリングしたときの俳句も作れるかな」

ゆき「うん、できたよ」

カタクリが 走ってる中 咲いている

爺爺「そうか、カタクリは多分春の季語だと思うからいいんじゃない」

ゆき「もう一つできたよ」

山の中 走って歩いて 頑張った

爺爺「ゆき、季語がないよ」

ゆき「そうなんだ？」

草の中 走って歩いて 頑張った

「これは？」

爺爺「うーん、草は季語としてはどうなんかな？季語がないと同じ五七五で作っても川柳になっちゃうんだ」

ゆき「冬には草が無いからいいんじゃないの」

爺爺「俳句は、昔からいろんな読ませ方をするから草を新緑（クサ）と読ませたら季語とにならないかな」

ゆき「うん、いいよ。又、作るね」

町探検（5月28日）

小学生が学校で、地図らしいものの最初の勉強は町探検らしい。

5月28日の昼直前、近くの川（白水川）で10人ぐらいの子供たちが、短パンや水パンになって網をもって魚を追いかけたり、釣りざおで釣りをしたりしていた。今日は平日、学校は休みじゃなし、だが教師の姿も見えないし保護者もいない。

子供たちが遊んでるところは、水路の取り入れ口で深いところもある。通りがかりだったが、心配で何をしてるか聞いてみた。

町探検だった。先生から駅と大きな道路だけ書かれた地図を渡されて、目立つ建物を書いていくものだった。指導員講習で経験するバーンオリエンテーリングの初歩版かな。

ほおり投げてる地図を見たら、大きなスーパーをデカク書いただけだった。小魚（ウグイ）は居るし深みの草影から50cmはあるような鯉が姿を見せて悠々と泳いでるし、行動を規制する先生も居ないし、地図なんてどうでも良くなって学校に戻る時間も忘れたようだった。

オリエンテーリングの話をしてやり、学校に戻る時間を聞いたら、とっくに帰らなければ間に合わない時刻だ。彼らは慌てて帰った。

所要を済ませた後、再び其処によって見たら、慌てて引き上げたので網や釣竿の忘れ物が残っていた。

秋には、近くの公園（堂の前公園）でオリエンテーリング大会のあることを知らせた。何人来てくれるか楽しみである。

ゆき（小3）に町探検のことを聞いてみたら、幸の学校でも同じようなことをやったらしい。